



いずみ

No.63

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 33



《割り残されたかたち》

山谷 圭司

(2 ページに「作者の言葉」)

「旭川彫刻フェスタ」10周年記念展で、道立旭川美術館内に1ヵ月ほど展示されていた作品。今は作者の仕事場である森の中に残骸が残っている。おそらくそのうち、土木工事の捨て石になるだろうと思う。紙だから残らない、石だから残るというわけではなく、そのためにこの写真は貴重に思っている。作品を自選したというより、この図録の写真が気に入っている。撮影者はわからないのだが…。
(山谷圭司 1955年、旭川市生まれ、上富良野在住)

タイトル：《割り残されたかたち》
制作年：2010年
素材：上富良野硬石（安山岩）
サイズ：H98×W215×D181mm
設置場所：現存せず

連載 宮の森の四季 33

本郷新記念札幌彫刻美術館

ひとくちに雪と言うけれど

館長 寺嶋弘道

今年の宮の森も昨年と同じように大雪となった。除雪作業や落雪の心配、路面での転倒やクルマの通行障害など雪害対策に明け暮れる。降雪に始まり融雪に終わる北国の冬。だが、雪は大地を潤し、営農者やスキー場にとっては恩恵の源、景況を占うバロメーターでもある。

彫刻美術館にとっても、毎年1月下旬に開催している「雪像彫刻展」は前庭に降り積もった雪が素材だから、有難く大切な天の恵みだ。必要な時期に必要な量が降ってくれるとヤキモキしないで済むのだけれど、こればかりは天候次第。クリスマス頃から堆積作業をはじめ、直前1週間の造形作業まで、作家や高校生の皆さんの美術館通いが続く。合板を組み合わせておよそ2メートル四方の囲いを作り、雪を投入して踏み固め大きな白い雪塊を作る。そして、思い思いに形を削り出していく。今年も10基の作品とすべり台が完成した。そのほかに私も1点、本郷新作品との合作作り(?)に励んでみた＝写真＝。



雪の造形にはもう一つ問題がある。雪の硬さや湿り気や粒の粗さが成形するとき大いに影響するのだ。サラサラの雪では固まらず、シャーベット状の雪では氷塊となって難渋する。ひとくちに雪と言ってもさまざま、雪質に応じた工夫が必要なのである。

本郷新との合作作りでは、ブロンズ作品の直上に雪を積み上げていくので、万一、雪塊の滑落や暖気による倒壊を考えると、氷状の硬い雪ではキズつけることになりかねない。ちょうど運よく、オープン前日に20センチほどの降雪があり、除雪作業で集めたその雪の塊がソフトでいい按配、崩れぬようにそおっと積むことができたのだ。かくして「少女のイグルー」は完成。会場で一番柔らかい雪の造形物だったことにお気づきいただけたらだろうか。

建築家・田上義也たのうえよしやとれきけん建築アーカイブ

角 幸博

(NPO 法人歴史的地域資産研究機構代表理事

・北海道大学名誉教授)

本郷新記念札幌彫刻美術館本館(1971年)は、道立近代美術館の建築面積の20分の1弱の小さな建物で、まわりの住宅の方が大きくさえ感じられる規模である。この設計が、建築家・田上義也(1899-1991)が主宰する田上建築制作事務所であることは、多くの方がご存知だろう。道路の向かい側の記念館(旧本郷新アトリエ)は、建築家・上遠野徹かとのてつ(1924-2009)の設計で1977年(昭和52)に完成している。

筆者は幸いにも生前、お二人とも親しくさせていただいた。田上先生とは、スイス人建築家マックス・ヒンデルのことをお聞きした1977年に初めて面会し、他界されるまで何かとお付き合いいただいたし、先生所蔵の戦前図面一式500数点の寄託も受けることとなった。この寄託の仲介をしてくださったのが上遠野先生である。先生は1963年から88年まで北大建築工学科非常勤講師をされていたが、筆者ら建築21期生は1969年に造形演習を受け持っていた。ちょうど学生運動が吹き荒れる中、校舎が封鎖されて製図室が使用できないこともあって、先生宅の居間で即日設計と模型制作を一日がかりで完成させた。当時の稚拙なバルサ材の模型を、建築写真家に撮影してもらう機会を作ってください、またヒンデル設計の北星学園女教師館(1926年、現創立百周年記念館)の実測調査や同館保存の機会も与えてくださり、先生が他界されるま

で多くの導きをいただくことができた。

2012年に大学を退職し、NPO法人歴史的地域資産研究機構を立ち上げる際に、れきけん建築アーカイブの収集・公開も開始したが、アーカイブの基になったのは、筆者が収集した棟札むなふだの他、田上義也建築図面500数点とスケッチブックや蔵書類、関連写真などである。蔵書やスケッチブックは、田上先生が他界された1991年8月の5ヵ月前3月に私に託されたものである。虫が知らせたと言おうか、今となっては大切な形見分けとなっている。

筆者も70歳を越え、このアーカイブの持続と保存とが大きな課題となっている。このNPO法人が存続している間はともかく、そのあと、これらの貴重な資史料を次の世代へ、いかにして継承するかである。今から30年前に北海道建築博物館の設置を提案したことがあるが、今一度その必要性を訴えたい。建築家のオリジナル図面やスケッチブックの収集・保存のほか、歴史的建造物の実測図や建築図書の集積、建築家の作品や失われた建物のフィルムライブラリー、解体の運命を辿る建物たちの部材や材料、家具などの収蔵、職人の伝統的な技・構想・道具などの保存継承や、先日逝去された建築史研究者仲間の所蔵資料の継承なども含まれるかもしれない。公的な建築アーカイブの設立を夢見つつ、今はれきけん建築アーカイブの維持と充実を模索中である。

ロブビアの彫刻と余市のワイン

彫刻家・松本隆

ルカ・デッラ・ロブビア (1399/1400-1482年、フィレンツェ) は、日本ではあまり馴染みがありませんが、イタリアでは有名な彫刻家です。トスカーナ地方を中心に教会の壁龕へきがんなどに、聖母子などを主題にした青地に白の美しい光沢の陶製彫刻を数多く作りました。この素材は専門的には「施釉テラコッタ」と呼ばれます。それは、公共彫刻にとって優れた素材で、皮膜は堅牢で褪色せず500年前の色がそのまま現在に伝わっています。崇高かつ親しみ易さをもったロブビアの彫刻はトスカーナの青い空、テラコッタの屋根、教会建築、空気などとの調和のなかで存在し、彫刻にとってロケーションが切り離せないものであることを感じさせられます。

現在私はルカによって創始された「ロブビア工房の施釉テラコッタ彫刻」の技法研究を行っています。そして「ロブビア家の秘密」と呼ばれる、釉薬配合の謎に直面している状況です。どの世界でも釉薬のレシピは「秘伝」であることが多く、ロブビア工房も例外ではありません。そんな秘密を解き明かすことは難しい試みですが、やりがいのある研究ともいえます。

ロブビア家の秘密(レシピ)は秘中のうちに失われ、現在ではその技術を伝える文献は一つも残っていません。ロブビアの釉薬は、当時のマジョリカ

焼を応用したものと考えられています。唯一の手掛かりとして「陶芸三書」というマジョリカ

焼の技法に触れた古文書があります。その中には、ワインの酒粕(発酵中に溜まった滓)の灰よる釉薬の記述があり、私はこれを再現の第一の手掛かりにしようと考えました。

ところが、その様なものは市販されていません。ワインの酒粕の入手を模索中に彫刻家の唐牛幸史さんに相談させて頂いたところ、札幌彫刻美術館友の会の多くの方々の目を見張る行動力で情報を収集していただきました。僕のなかでは当面の入手を諦めかけていたのですが、余市にあるオチガビワイナリーさんから大量の酒粕を提供して頂けるという話が急遽舞い込んできたのです。2017年12月28日にお話をいただき、次の日には私はもう札幌に降り立っていました。「居ても立ってもいられない」というのはこのことでしょうか。唐牛さんとともに30日にお伺いして400リットルもの酒粕を頂くことが出来たのです。一連の出来事は「奇跡的」としか言いようがなく、私は宝物を手にした喜びとともに、友の会の方々との出会いとお力に大変感謝しています。まだまだ研究は過渡期です。いつの日か、余市のワインからできた陶製彫刻をお見せできるよう健闘して参ります。



ロブビア作《林檎の聖母》

《木下成太郎像》 楽しき泣き笑い作業

亀谷 隆 (会員)

武蔵野美術大学校友会北海道支部長

札幌・中島公園に設置の《木下成太郎像》の修復概要については、「いずみ」62号で紹介されたので、修復作業時の出来事を話しましょう。

設置より76年余の時間が過ぎ、風雪などによつての損傷調査は、1998年(平成10年)から毎年、1～2回にわたり、武蔵野美術大学と大東文化大学の協力により、武蔵野美術大学彫刻科・黒川弘毅教授を中心に行われており、さらに、札幌彫刻美術館友の会と両大学の校友会、同窓会の北海道支部も協力している。

2016年秋の内視鏡調査で、基壇と像とを固定させている直径18mmの鉄ボルトの中心部が2mmほどになるまで錆びて細くなっているのが判明した。

調査結果は緊急報告として黒川教授が作成し、支部から所有・管理者である札幌市建設局みどりの推進部に修復を急いで行うことを要請した。

翌17年春、黒川教授より弘前城復元を視察していた筆者に電話があり、「市より修復の具体的な内容を求められています」とのこと、夏に黒川教授を中心に、彫刻修復の経験がある大利誠司氏(道教育大学札幌校卒)、彫刻家の唐牛幸史氏(金沢美術工芸大学卒)、高嶋直人氏(黒川研究室)によつて具体的な事前調査を行い、夏祭りの屋台組みを目にしながら、像の周辺の小枝に蚊取り線香を吊るし、カラスの糞に注意しての作業にあたった。

その後、具体的作業は、雪降る直前の17年11月7日から10日までの4日間とし、修復は創業110年の歴史と実績

を持つ六書堂(札幌、代表・藤田開)が請け負った。

7日に吊り上げなどの手順を図示した書類を基に日程、分担、連絡網、機材確認、不足資材調達などの打ち合わせを行った。翌8日は、肌寒い日の足場組みとなり、夏の蚊取り線香に代わって、晩秋のカイロとなり、昼食は温かい飲み物と弁当で過ごし、唐牛さんはカラスに弁当の肉を奪われたりし、屋外作業で気を付けることを知った。

また、市の指示で夜の7時まで警備するようにとのこと、大利さんと唐牛さんが寒い夜の警備にあたった。

足場組みを終えた9日、午前中に基壇と像とを切り離し、晒(さらし)などで養生した後、パイプで固定し、約500m南の公園事務所倉庫に搬入し、ほつとした途端、頭上の雲行きが怪しくなり、午後には大雨の悪天候となった。

そんな嵐の中、立会人である彫刻美術館の寺嶋館長に確認に来ていただき、今後の修復などについて関係者と話し合った。

その夜、テレビで中島公園内のトイレの天井が雨の影響で落下したとの報道、翌日には近くのトイレが使えなくなり、道立文学館まで歩く羽目になった。

夏の蚊、晩秋のカイロ、昼のカラス、急な大雨、使用禁止のトイレなど、ふり返ればさまざまなことが起きるのも楽しみの一つかもしれない気持ちで今年の修復を終えた。

北海道 150 周年の幕開け 友の会新年会

18 世紀イタリアヴァイオリンの響きを体感



2018年の友の会新年会が1月27日、札幌・中央区のOKUI MIGAKUギャラリーで開かれ、橋本信夫会長が「北海道150周年を記念する今年には北海道の開拓に関連する彫刻100作品の選り出し、カタログ編纂、地図コンテンツ制作など多くのプログラムが予定されて

おり、ウェブを活用して全国・世界に向けて発信していこう」と熱く抱負を語った。

次いで、高橋大作副会長が円山動物園の山内壮夫作《よいこつよいこ》像の修復状況を報告、地元業者と彫刻家・唐牛幸史氏の尽力で無残な姿から美しく蘇るまでの工程をスクリーンで紹介した。また、続いて、中島公園にある武蔵野美大創設者でもあった《木下成太郎像》(朝倉文夫作)修復について同大校友会北海道支部の亀谷隆支部長が報告。設置以来75年もの時を経て、台座ばかりでなく本体にも亀裂が見られ、台座からはずして修復作業に入っているという。

このあと、ランチをはさみながら北大クラーク像の作者、田嶋碩朗の伝記『彫刻家 父・田嶋碩朗のこと』の著者・山崎貞子さん、広田まゆみ道議、篠田江里子札幌市議、札幌彫刻美術館の寺嶋弘道館長ほか新入会員3人のスピーチがあった。

この日のメインイベントは橋本会長が所蔵する18世紀のイタリア製ヴァイオリンによるミニコンサ

ート。ニューヨーク・フィル楽団員の手を経て会長のもとに渡った経緯などが語られ、ヴァイオリンの歴史やカルロ・トノーニ製作のこの名器に皆の期待が大きくなりつつあった中、ヴァイオリニストの鈴木京さんによる演奏は、その期待を十二分に上回った。贋作が出回り本物に出会える確率は100分の1ほどとのことだったが、力強く美しいその音色は本物で、会場を魅了した。



最後は恒例の参加者全員による合唱。奥井理作品に取り囲まれ、鈴木さんのヴァイオリンと吉泉善太さんのピアノという贅沢な伴奏で「上を向いて歩こう」などを歌って新年会を閉めた。

本日のプログラム	
1. 開会	～司会 高橋淑子
2. 新年のご挨拶	～友の会 会長 橋本信夫
3. 友の会 野外彫刻の修復の実態	高橋大作副会長 亀谷隆氏 橋本信夫会長
4. 会食 テーブルスピーチ	
5. ミニコンサート ～	18世紀のイタリアヴァイオリンの響き 初めに 楽器の歴史 橋本信夫会長 ヴァイオリン 鈴木京(すずきみさと)
ピアノ	吉泉
プログラム	♪クラリスラー 美しきロスマリン ♪モーツァルト ヴァイオリン・ソナタ ト長調 k.301 ♪ラヴェル ツィガーヌ
6. 歌を一緒に	
7. 閉会	～友の会 副会長 大内 和

<お知らせ>

新年会に参加した「彫刻家 父・田嶋碩朗のこと」の著者、山崎貞子さんから希望者に著書を寄贈したいとの申し出がありました。希望者は事務局の細川さん(090-9435-2551)まで連絡を

北海道 150 年事業

「北海道みらい事業」に応募
彫刻 100 選地図コンテンツ制作

北海道 150 年を盛り上げるための「北海道みらい事業」に友の会も北海道史に関連するモニュメント彫刻 100 点を選び、カタログ作成と彫刻地図の制作に取り組む。

事業は 2018 年が「北海道」と命名されて 150 年になることから、これまでの先人の偉業を振り返り、未来を展望する事業として北海道 150 年事業実行委員会が募集、友の会が応募した。

会員だった故・仲野三郎さんが単独、全道を回って記録した約 3000 点の彫刻の写真データの中から歴史的なモニュメント作品 100 点を選び出し、彫刻カタログとして編集すると共にデータをインターネットに載せ、デジタル彫刻地図コンテンツとして活用できるようにする。これによって北海道史や郷土史に関連する彫刻に光をあて、教育や観光などに利用してもらおうのが狙い。

彫刻美術館支援活動

図書コーナー窓口と蔵書整理

毎週土曜日午後実施

札幌彫刻美術館の記念館 2 階に今年 1 月から図書コーナーが設置され、美術館からの要請を受けた友の会の会員が交代で閲覧受付、図書整理などにあたっている。

同美術館には彫刻家・本郷新が収集した多数の蔵書などがあり、これらを同館を訪れる美術ファンにも利用してもらいたい



と同館が記念館 2 階にコーナーを設けた。本郷新の著書をはじめ、収集した図書などから 50 冊ほどを並べ、来館者が自由に読むことができるスタイルになっている。

コーナーは土曜日午後からで、そのつど友の会会員が当番でコーナーに立ち会い、閲覧の受付



などを行っている。

また、同館が所蔵している本郷の蔵書など約 3000 冊の図書整理も行っており、交代で蔵書の分類、確認、ラベル作成などを行い将来の有効利用に役立てる。



HP「街なかの美術館」

医療情報誌「ケア」に連載

友の会のホームページで公開している札幌市内の彫刻地図ガイド「街なかの美術館」が札幌市の北海道医療新聞社が毎月発行している医療情報誌「ケア」に 4 月から連載されることになった。



「街なかの美術館」は札幌市内にあるざっと 750 点の野外彫刻を地図の上から検索すると彫刻の写真と共に所在地、作者、制作年、解説が読み取れるもので、

友の会ホームページの隠れたベストセラー。

「ケア」への掲載は同新聞社からの申し入れ。すでに橋本会長らが編集スタッフと打ち合わせを重ねており、計画では「散歩道」のタイトルで、4 月号から毎月 3 ページで友の会の持つ彫刻データを駆使して市内各区に点在する彫刻を掲載する予定。彫刻の数が多いことから長期の連載になる見込み。

友の会としては地道な活動が社会から認められたのと同時に新たな媒体で全道的に活動が紹介されることになる。

「ケア」は 18 cm×17 cm のほぼ正方形で 60 頁。発行部数は 4 万部、定価本体 334 円。

読み方は ヤマウチ

彫刻家・山内壮夫

著作権は 友の会が管理

北海道を代表する彫刻家・山内壮夫 (1907—75 年) の名前の読み方はこれまで「ヤマノウチ」と「ヤマウチ」で統一されていなかったが、友の会は今後、読み方を「ヤマウチ」に統一することにした。遺族との話し合いなどから、山内家では「ヤマウチ」と言っていることなどを根拠にした。

また、山内作品の著作権についても、遺族との手紙のやり取りを重ね、昨年 9 月、「私たち故山内壮夫の遺族は北海道における故山内壮夫の作品に関して、その資料の使用や彫刻などの維持保全の時期、方法その他を札幌彫刻美術館友の会に一任いたします」との文書を受け、事実上、山内作品の管理などを友の会に委ねられることになった。

事務局日誌

▼2017年12月14日＝12月定例役員会(エルプラザ)北海道150年記念事業参加、美術館図書整理など協議▼16日＝彫刻美術館図書コーナー開設、支援▼20日＝北海道みらい事業登録申請▼27日＝会報「いずみ」62号発行、発送▼2018年1月11日＝1月定例役員会(エルプラザ)新年会打ち合わせほか▼19日＝札幌国際プラザ企画事業部の池田翔氏に活動状況説明▼27日＝2018年友の会新年会(奥井理ギャラリー)▼29日＝北海道医療新聞「ケア」誌と記事掲載で打ち合わせ▼2月8日＝2月定例役員会(エルプラザ)2018年度総会日程ほか▼9日＝ゆきあかりin中島公園参加

編集後記

▼彫刻美術館で開催中の「ふれる彫刻 手でみるアート」展。本郷新の《馬の首》《不死鳥》《哭》などおなじみの作品が並び、手を触れられる作品も▼恐る恐る作品に触れるとごつごつした作品の肌触りから本郷のごついが温かな手の感触が伝わって来るようだった。
(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.63

2018年4月1日発行

発行人 橋本 信夫

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30

011-884-6025)

印刷

山藤三陽印刷

会報「いずみ」63号 目次

自作自選33 《割り残されたかたち》	山谷圭司	表紙
作者の言葉		2
宮の森の四季33「ひとくちに雪と言うけれど」	寺嶋弘道	2
風見鶏「建築家田上義也とれきけん建築アーカイブ」	角 幸博	3
寄稿「ロビビアの彫刻と余市のワイン」	松本 隆	4
寄稿《木下成太郎像》の楽しき泣き笑い作業	亀谷 隆	5
友の会ニュース		6-7
2018年友の会新年会/北海道みらい事業に応募/図書コーナーボランティア/医療情報誌「ケア」に連載/山内壮夫の読み方と著作権事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか		
		8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■所蔵品展「コレクション展 ふれる彫刻 手でみるアート」

開催中～4月15日(日)

■企画展「第2回本郷新記念札幌彫刻賞受賞記念

加藤 宏子 展」

4月28日(土)～6月17日(日)

2月7日に除幕された第2回本郷新記念札幌彫刻賞の受賞作家、札幌在住、加藤宏子の受賞記念展。和紙の原料である楮を素材とした作品を手がけ、彫刻の新たな可能性を感じさせる近作を中心に展示。

記念館

■所蔵作品展

常設展(通) 本郷新、その生涯と作品

本郷新が手掛けた野外彫刻の石膏原型やブロンズ、木彫など代表作、制作道具などを展示。また、本郷の彫刻一般についての図書、蔵書などを情報コーナーで紹介する。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>